

大槻信良著

朱子四書集註典據考

臺灣學生書局印行

大 楓 信 良

著

圖書館

朱子四書集註典據考

江 工業 學院 书 章

書藏

臺灣學生書局印行

著者略歷

1911 年，生於京都府福知山市，舊姓清水。現任千葉大學教授。

1941 年，畢業於廣島文理科大學，專攻中國哲學。

1949 年，中國思想史古代中世篇；50年，近世中國思想史出版（明治圖書出版社）。

1971 年，丹山詩稿（漢詩集）出版，此外，若干朱子學論文發表。

朱子四書集註典據考 全一冊

著作者：大 極 信 良

出版者：臺灣學生書局

本書局登記證字號：行政院新聞局局版臺業字第1200號

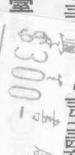
發行人：馮 愛 羣

發行所：臺灣學生書局

臺北市羅斯福路三段二九八號

郵政劃撥帳號：二四六六號

電話：三一〇七、三一〇五、三一〇五



定價新臺

中華民國六十五年四月初版

朱子四書集註典據考序

朱子的四書集註，非特在元明清三代裏乃是中國士子必讀的書，即在現在，亦爲凡研究中國學術史的人所應當一讀的書。

四書集註雖爲朱子生平精力所在，但措詞行文，主於簡要，所以朱子卒後不久，即有信從朱子學說的人士爲作疏證，以便學者。從宋季以來，這類著作很多，對於讀朱子四書集註的人都有些幫助。現在日本大槻信良教授所著的朱子四書集註典據考，實可以說是這類著作中最值得我們注意的一種。

考證的工作，當然是後來居上。大槻教授的作品從這個情形所得的優點，自不待我來稱讚了。從學術思想史的立場來說，我以爲大槻教授已給了我們一部對於研究朱子學最爲有用的書籍。大槻教授鑽研朱子學，已三十多年；這部四書集註典據考的寫成，亦已二十四年。這二十四年裏，他對這書「搜訂增補、不遺餘力。」我雖然沒有對這書作校勘的工作，但我以爲著作人的謹慎和勤敏，就是他的著作可靠的保證。

大槻教授用「古」、「近」、「新」等字來標朱註中訓詁名物的根源，我覺得是一個很好的方法；這給讀者「一目了然」的快感。一個學者的尋繹朱註，當然有種種不同的目的。有了這些標字，指明朱子在那些地方不違古訓，那些地方自出新意，可以省却查考人的許多工夫。

從思想史的觀點研究朱子，自不能限於他的「古訓是式」。朱註的根源古訓，當然可以見朱子做學問的詳審；但朱註最可貴的地方，尤在他的創立新說。這一點宋代的學者金仁山似已看到了。他在「論語集註考證」裏用了千餘字，推明顏淵問仁章註裏的「仁者本心之全德」一語，極有益於治學術思想史的人。但可惜他只偶然注意到「仁」字，朱子別的「新」見解，他並沒有一一舉出。而現在大槻教授的書，於朱子註中的新義，都為標出：這對研治朱子思想的人實是無量的方便。（大槻教授於論語顏淵篇註「仁者本心之全德」一語沒有標「新」字；這當是因為這句註和下文「為仁」的註隔了「克」、「己」、「復」三字的註，且「全其心之德」、「心之全德」等語已見「為仁」的註裏，所以便沒有把「仁者本心之全德」這一語錄出。大槻教授於學而篇「有子曰章」的註「仁者、愛之理、心之德也」和孟子公孫丑篇「矢人章」的註「仁者，在人則為本心全體之德」等語，都標「新」字，顏淵篇「仁」字的註讀者亦自可以意補。）

大槻教授在他作這部書的凡例中說，「世謂皇疏亡佚於南宋中葉，而朱子不見之矣。然朱註凡六十五條依據皇疏，不容疑也。」按：皇侃論語義疏，著錄於中興書目和遂初堂書目，又見於郡齋讀書志中；朱子於這公私三藏，似都可以得見這部書。且朱子在決心「盡刪餘說、獨取二程先生及其門人朋友數家之說」以前，亦嘗「徧求古今諸儒之說，合而編之」（論語要義序）：我們從這一

句話，自可推想到朱子的讀過皇疏。往昔，我也以爲朱子或沒有見過皇疏；不然，爲什麼皇疏裏許多勝義、朱子竟不採用！現在想起來，這不足爲朱子不見皇疏的理由。朱子於三十四歲時編成論語要義，又成論語訓蒙口義一書。「本之注疏以通其訓詁；參之釋文以正其音讀；然後會之於諸老先生之說以發其精微。」（口義序）大概朱子於三十四歲以後，於四書的訓詁固從注疏，於義理則專從二程子和他們的門徒。咸平時邢昺刪定皇疏，於皇疏訓詁多擯棄不取，所以朱子論語集註裏的訓詁、多和皇疏的相同，蓋猶是他三十四歲前所採取的。至於論語集註關於義理的部分，在何氏集解以外，差不多全是出自論語要義和朱子所自有的。論語集註成於淳熙四年，在論語要義成書十四年以後。這十四年中間，實在是朱子對於論語見解的成熟時期；這十四年中間，朱子當不爲論語的大指要歸而去借讀皇疏。這是我現在的想法，不知大槻教授以爲對不對。

中華民國六十五年一月七日毛子水序

序

余埋頭於朱子學之研究，逾三十多年，靜觀斯學，朱子之哲學體系、不愧為中國哲學連峰中之一大巨峰也，此論誰得疑乎。

通常對朱註之加於古註者，世稱「新註」。然其所謂「新」，意義不凡。第一、朱子施註立脚於漢魏以來十三經注疏等之古註釋學，基礎鞏固；第二、復參酌國朝諸老先生等之學說，旁徵博引，涉獵廣汎；第三、最後以折衷態度，綜合而創新說。憑此三點，朱子已集學術之大成矣。職是之故，欲研究朱子之學，非由四書集註着手不為功。而朱註之依據為何，則更有加以具體的立證或試作推斷之必要也。

綜觀中國之哲學家解釋經書之方法與態度，必先表明自己為學之立場，研究朱子不只限於探究語類文集，尤須留意於朱子註釋四書之態度，而詳晰其依據之出典。

古今研究四書集註之書，汗牛充棟，但少完璧。舉例而言，關於論語集註，有梁章鉅「論語集註旁證」與簡朝亮「論語集註補正述疏」，兩書可謂超群之作，仍不能盡道二程諸宋朝學人之發揮。他若金履祥之「考證」、李滋然之「古義箋」以及李中培之「不廢古訓說」等書，獨偏於朱子學古方面，分析雖然詳明，但對朱子學新方面，實感不足。本書欲補上述之缺點，除闡明朱註之學古方面及近人國朝諸老先生等文獻外，特別重視朱子之新解，如是，其所依據出典，可窺全貌。

昔日以考證聞名之朱子學者陳澧，曾引用朱子「論語訓蒙口義序」於東塾讀書記。此書著於隆興元年（一六三），時年三十有四。朱子曰「本之注疏、以通其訓詁、參之釋文、以正其音讀、然後會之於諸老先生之說、以發其精微」。如此解經態度，不僅止於論語，而能貫通於四書全體矣，本書當更強調之。

本書脫稿於昭和二十七年（一九五二），嗣後檢訂增補，不遺餘力。其目的在以本書與四書集註相互參照，共讀之。果如斯，對朱註之玩索，得見進境。是所以不獨納於篋底，而敢公諸於江湖，尚乞君子之清鑑也。本書問世多蒙京都中文出版社李迺揚社長之贊助，上梓之際復蒙漢譯拙序，隆情厚意，不能或忘，謹此一併致甚深之謝悃！

一九七六年、千葉大學停年退官之春 丹山 大槻信良 謹識

序

朱子學の研究に埋頭三十年餘の星霜を闇したが、靜かに觀察すると、朱子の哲學體系の峰が、中國哲學という連峰の中の巍然たる一大巨峰であることに異論を唱える人はないと思う。

通例朱注は、古注に對して新注と言われるが、言葉の平板な意味での新ではなくて、漢魏以來の夥しい十三經注疏を中心とする古注釋學を十分にふまえ、その上に國朝諸老先生らの説を參照し、更に自己の新説を加えて折衷し綜合した革新的解經としての新注の意味を再認識することが、朱子學研究上必要であると思う。こういう觀點から本書では、朱子の四書の注が何に依據して書かれたかを具體的に立證し、また想定せんとした。一般的に中國の哲學者は、經書をいかに解釋するか、つまりその解經態度の中に自己の爲學の立場を表明しているので、朱子研究には、語類や文集と共に、所依の經書である四書の注釋態度に深層な注意を拂わねばならぬと考える。

しかしこの要望に應える爲に四書集註全體にわたつての完璧に近い研究書は稀有と言つてよい。「論語集註」について一例をみると、梁章鉅の「論語集註旁證」や簡朝亮の「論語集註補正述疏」は、卓抜した研究書であるが、二程などの宋朝學人への十分な顧慮に缺け、金履祥の「考證」、李滋然の「古義箋」、李中培の「不廢古訓說」などのように、顯著なもののみの要説、學古面の發明だけの偏向が見られ、必ずしも十分な総合的研究とは認め難いものがある。本書ではこれらの缺を補うべく朱注の學古面と共に、朱子にとつての近人國朝諸老先生らへの依據の面と朱子の新解釋、即ち朱子新義も可能な限り明らかにし、依據の全貌を具體的に明示しようと心がけた。

周知のように朱子は、陳澧が「東塾讀書記」に引用する如く、隆興元年三十四歳の著「語語訓蒙口義」の序で早くも「之を注疏に本づけて以てその訓詁を通じ、之を釋文に參えて以てその音讀を正し、然る後之を

諸老先生の説に會して以てその精微を發く」というが、この解經態度は獨り論語に止まらず四書を一貫しており、本書によつてもこの態度を證明しうると思う。

本書は昭和二十七年「四書集註章句典據考」としてまとめ、その後檢討補訂を加えたものである。四書集註を讀むに當つて、この書を併せ讀むならば、朱注の玩索に一層の理解を増すであろうと信じ、獨り篋底に納めず、敢て江湖に送つて、博雅の君子の清鑑を乞う次第である。終りに本書の上梓に際して一万ならぬ御援助を賜わつた中文出版社李廸揚社長の御厚意、序の漢譯を煩わした隆情に對し深甚なる感謝の意を表したい。

一九七六年、千葉大學停年退官の春

丹山 大榎信良 謹識

凡例

一 論語集註、孟子集註、大學章句、中庸章句，四者合稱「四書集註」；本書命名「朱子四書集註典據考」。朱子爲學之順序：學、論、孟、庸，茲謀編輯上之方便，改其順序爲：論、孟、學、庸。

二 集註有關訓詁名物等，其註何所根據？朱子不欲一一明示；尤以「程子曰」之二程不分。他若「○氏曰」更不明瞭矣。爲期完全解讀，乃至熟知四書集註，凡此諸點，必須明瞭，本書即應此願望而編著者。典據中有確據及由推斷而判定者，皆力求簡捷，予以表明之。

三 四 (古) 表示朱子之依據或推斷之依據有關昌黎多古訓傳注文獻，更附其著者，即學古之面。

(近) 表示朱子之所謂國朝諸先生等及宋朝諸先輩學侶之必要者。即採用近人之學者。

(古近) (古翻) 表示釋風之折衷。

五 六 七 朱註中有中略、下略、標起止等省略處，朱子自註以外有關諸氏之典據，原則上不加究考。

八 關於釋文、音義，在朱注表示於四聲者，省略之；本書專就反（切）表示於音者爲中心，考證其出典依據。

七 朱子論語精義、孟子精義等所收之程顥、程頤、張載、范祖禹、呂希哲、呂大臨、謝良佐、游酢、楊時、侯仲良、尹焞等人所謂國朝諸老先生之稱呼，皆諱其名而稱字號；其他概直稱姓名，是爲通例。

八 引用書名之略稱，例示如左：

○論語精義、孟子精義→精義

○孟子章指→章指

○陸德明經典釋文→釋文

○孔穎達疏→孔疏

○孫奭孟子音義→音義

○論語集解→集解

○皇侃論語義疏→義疏或皇疏

○邢昺論語疏→邢疏

○孫奭孟子疏→孫疏

○孟子趙岐注→趙注

○中庸輯略→輯略

○許慎說文解字→說文
○宋史藝文志→宋志

九

朱註引用諸子之稱呼一致，「子」用於程明道、伊川、張橫渠等；「師」指李延平；「氏」用於其他國朝諸老先生及古今諸子；「字」爲張敬夫（張栻）等。「聘君」指幼時師劉勉之；「侍讀」爲劉敞；「侍講」爲呂原明。凡此用法，皆成體系，可謂朱子正名之具體表現也。

在引用諸子說之後，而述己見，則稱「愚按」或「愚謂」，不能肯定時，態度謙虛則曰：「未詳孰是」。此外，發見朱注之誤謬有六（論語四、孟子二），本書冠以 **集註誤** 表明之。

世謂皇疏亡佚於南宋中葉，而朱子不見之矣。然朱註凡六十五條，依據皇疏，不容疑也。因而推定朱子參酌皇疏也。

凡例

- 一 論語集註、孟子集註、大學章句、中庸章句を四書集註とし、この書を「朱子四書集註典據考」と名づけた。朱子爲學の序次からは、學論孟庸とすべきであるが、便宜上論孟學庸とした。
- 二 集註では、訓詁名物等について何に基づいて注したかを一々明示せず、殊に「程子曰」の場合、二程の何れか不明であり、他の「○氏曰」の場合も明瞭でない。集註を完全に解讀し、朱子の四書研究を熟知するためには、これらの點を解明する必要がある。この書はこの要望にも應えるものである。
- 三 典據について確實に依據したものと、依據したと想定されるものとがあるが、できるだけその事情を簡潔に表明した。
- 四 (回) 印は朱子が依據又はそう想定される夥しい古訓詁傳注文獻又はその人に附し、朱子の所謂國朝諸老先生など宋朝諸先輩學侶の必要なものには印を、卽は朱子の新解釋、(回印)、(回卽)は折衷的解釋風を示す場合に用いた。
- 五 朱注の中、中略、下略、標起止で省略したものがあり、朱子の自注以外の諸氏に就ての典據には及ばないのを原則とする。
- 六 釋文、音義に關して、朱注で四聲で現わしているものは省き、専ら反(切)で現わしているもの、音で現わしているものを中心に、その典據を考えた。
- 七 朱子の論語精義、孟子精義等に所收の程顥、程頤、張載、范祖禹、呂希哲、呂大臨、謝良佐、游酢、楊時、侯仲良、尹焞の所謂國朝諸老先生の呼稱は、皆名を直稱せず、程明道、呂與叔、尹彥明の如く字號を稱し、他は概ね姓名を直稱するを通例とする。
- 八 引用書名の略稱を例示すれば

○論語精義、孟子精義→精義

○孟子章指→章指

○陸德明經典釋文→釋文

○孔穎達疏→孔疏

○孫奭孟子音義→音義

○許慎說文解字→說文

○宋史藝文志→宋志

九

○論語集解→集解

○皇侃論語義疏→義疏または皇疏

○邢昺論語疏→邢疏

○孫奭孟子疏→孫疏

○孟子趙岐注→趙注

○中庸輯略→輯略

朱注引用諸子の呼稱については一貫しており「子」は程明道、伊川、張橫渠らに用い、「師」は李延平に「氏」は、他の國朝諸老先生と古今の諸子に「字」は張敬夫（張栻）らに「聘君」は幼時の師劉勉之に、「侍讀」は劉敞に「侍講」は呂原明に使うなど、朱子の體系からする正名を具體化したものと言える。諸子の説引用の後に自説を述べる時は「愚按」「愚謂」で始め、斷定をはばかる際には「未だ孰れが是なるかを詳らかにせず」と謙虚な態度を示している。朱注の誤謬六（論語四・孟子二）を數えるが、**〔集註誤〕**と頭書してその都度明示した。

十 皇侃の「論語義疏」は南宋の中頃に亡佚し、朱子は之を見ていないとも言われるが、しかし朱註凡そ六十五條、皇疏に依據したこと明白である。因つて朱子は皇疏を參照したものと推定した。

朱子四書集註典據考

目 次

毛序	一一三
序	一一四
凡例	一一四
論語集註典據考	
學而第一	三一六
爲政第二	一七一三二
八佾第三	三三一四九
里仁第四	五〇一六三
公冶長第五	六四一八一
雍也第六	八二一一〇〇
述而第七	一〇一一一〇〇
泰伯第八	一二一一三三
子罕第九	一三四一五一
鄉黨第十	一五二一一七二
先進第十一	一七三一一八九
顏淵第十二	一九〇一二〇一
子路第十三	一〇二一二二六
憲問第十四	一一七一二四〇
衛靈公第十五	一四一一二五五
季氏第十六	一五六一一二六六
陽貨第十七	一六七一一八二
微子第十八	一八三一一九四
子張第十九	一九五一三〇五

堯曰第二十.....三〇六一三〇九

孟子集註典據考

梁惠王章句上.....	三一三一三三一
梁惠王章句下.....	三三二一三五五
公孫丑章句上.....	三五六一三七五
公孫丑章句下.....	三七六一三八九
滕文公章句上.....	三九〇一四一
滕文公章句下.....	四一二一四三〇
離婁章句上.....	四三一一四五二
離婁章句下.....	四五三一四七四
萬章章句上.....	四七五一四九〇
萬章章句下.....	四九一一五〇三
告子章句上.....	五〇四一五二一
告子章句下.....	五二二一五三六
盡心章句上.....	五三七一五五九
盡心章句下.....	五六〇一五八四

大學章句典據考

經一章.....	五八七一五八九
傳之首章.....	五九〇一五九一
傳之二章.....	五九一—五九二
傳之三章.....	五九二—五九四
傳之四章.....	五九五
傳之五章.....	五九五—五九六
傳之六章.....	五九六—五九七
傳之七章.....	五九七—五九八
傳之八章.....	五九八
傳之九章.....	五九八—五九九
傳之十章.....	六〇〇—六〇五

中庸章句典據考

篇首注.....	六〇九一六一〇
第一章.....	六一〇一六一三
第二章.....	六一三一六一四

第三章	六一四一六一五	第二十一章	六三九一六四〇
第四章	六一五	第二十二章	六四〇
第五章	六一五	第二十三章	六四〇一六四一
第六章	六一五一六一六	第二十四章	六四一一六四二
第七章	六一六	第二十五章	六四二一六四三
第八章	六一七	第二十六章	六四三一六四五
第九章	六一七	第二十七章	六四五一六四六
第十章	六一八	第二十八章	六四六一六四七
第十一章	六一八一六一九	第二十九章	六四八
第十二章	六一九一六二一	第三十章	六四九
第十三章	六二一一六二二	第三十一章	六五〇
第十四章	六二三	第三十二章	六五〇一六五二
第十五章		第三十三章	六五二一六五四
第十六章	六二四一六二五		
第十七章	六二五—六二六		
第十八章	六二六一六二八		
第十九章	六二八一六三一		
第二十章	六三二一六三九		

論語集註典據考